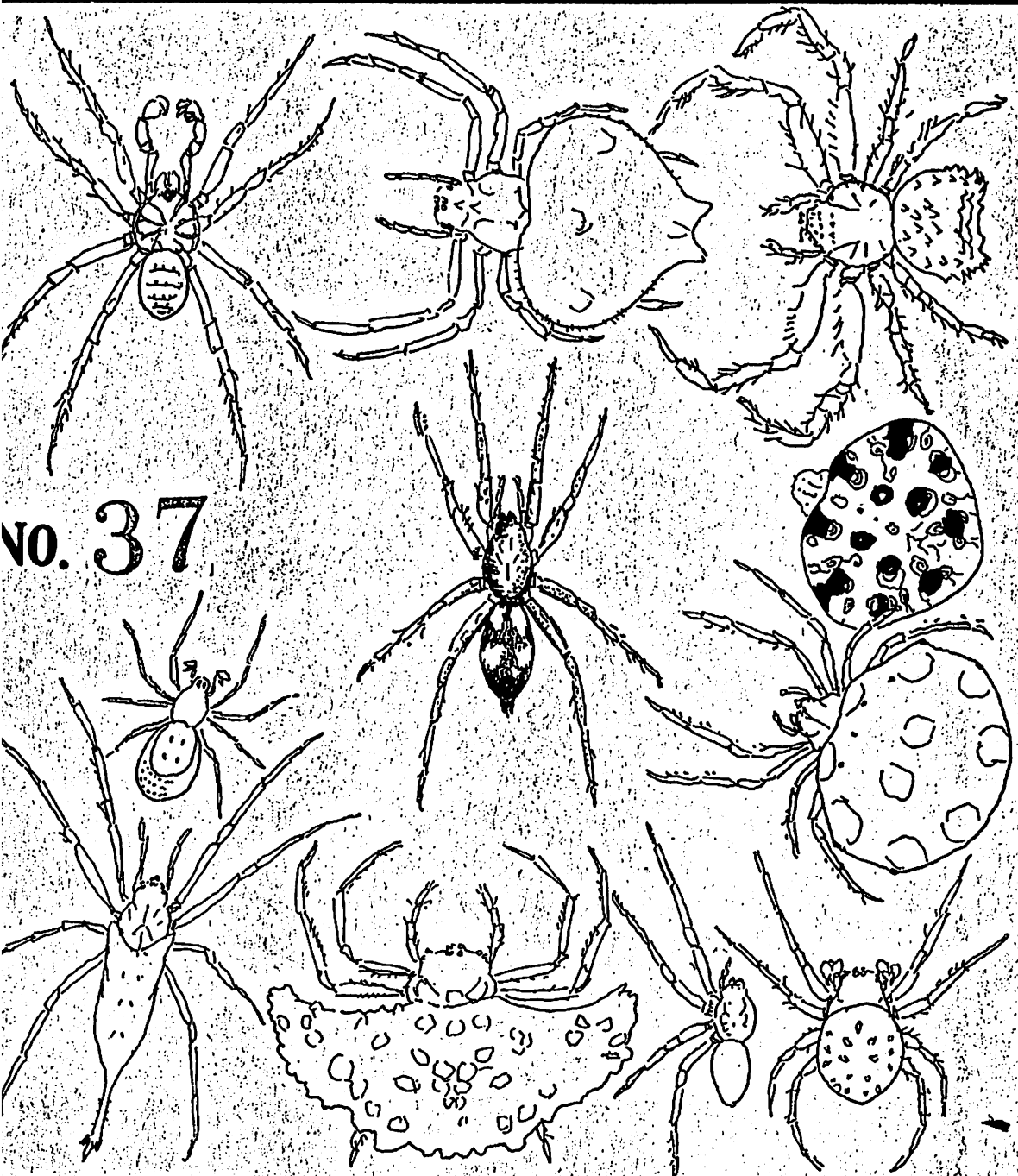


KISHIDAIA



no. 37

蜘蛛をたずねて(1)

大 利 昌 久

はじめに

東京クモ談話会企画による松本市周辺のクモ相の調査及び千国安之輔先生との懇談会は、残念ながら流会を余儀なくされたが、都合のつけられた千国先生、梅林先生それに私の3人は協議の結果、談話会の初志を貫くことにし、規模を縮少し美鈴湖周辺の採集を行なった。途中かなりの雨が降り、会がこの雨で流れてしまったかのように心附けない時もあったが、千国先生の御指導のもとかなりの成果をあげたので、ここに報告する。なお、会員の面倒を一手に引き受け旅館の世話から長野のクモの話など、大活躍をされた千国先生に談話会の諸氏と共に深謝するものである。分類は八木沼健夫著「日本の真正蜘蛛類相」に従った。

(1) シグモ科

1. シグモ 浅間温泉附近、民家に近接する木の根、垣根などに造巣している。

(2) ウズグモ科

2. マネキグモ 山手の低木に造網。体長10mmの見事な成雌。目下飼育中。

(3) ヒメグモ科

3. オナガグモ 卵のうを吊るした成体、孵化した幼体など多数。

長野県松本市

長野

松本

浅間・美鈴湖(採集地)

1972年8月26日

4. フタオイソウロウグモ クサグモの網に居候。3個の卵のうを吊るしている成体。(写真)

5. シロタマヒメグモ ススキの葉をまるめ卵室を設け、中で卵のうと共に棲んでいる成体。長野多産とのこと。(写真)

6. ツリガネヒメグモ 土粒にて鐘状住居。幼体が多い。

7. オオヒメグモ 旅館の便所、浅間温泉の民家、美鈴湖付近の公衆便所に成体、亜成体。

8. タカユヒメグモ 木枝の葉裏に成体。

(4) サラグモ科

9. フタスジサラグモ 交接期らしく雌雄同棲中を多数みかけた。

10. クスミサラグモ 多数、山林に生息。

11. アシナガサラグモ 雌の成体多数。水

KISHIDAIA №37 1973, Dec.

平から凸状血網を張る。

(5) コガネグモ科

12. ハツリグモ 山林の低木で、梅林先生が発見す。巻葉に卵のうあり。長野県新記録。
13. ヤエンオニグモ 山林の低木の葉裏に亜成体。
14. オニグモ 亜成体、成体。山林にいる。
15. ドヨウオニグモ 清流の附近にて亜成体。
16. ヤマシロオニグモ 山林にて採集。
17. ナガコガネグモ 民家の近くにて採集。
18. カラスゴミグモ 山林にて。スタビリメンタムを設けていない。腹部先端を曲げたりする。
19. ゴミグモ 成体は発見出来なかった。
20. ヨツデゴミグモ 幼体、亜成体多数。
21. ジョロウグモ まだ幼体から亜成体。

(6) カラカラグモ科

22. ヤマジグモ 金米糖様の卵のうを無数発見。1匹で9~10個位産んでいるようである。成体発見不能であった。(写真)

(7) アシナガグモ科

23. アシナガグモ 成体採集。
24. ウロコアシナガグモ 幼体。
25. キンヨウグモ ♂♀成体採集。山林の葉裏に生息。複雑に糸を張りまわしているだけで定形的な網はない。動作極めて敏捷である。(写真)

(8) ヒラタグモ科

26. ヒラタグモ 墓地の杉の樹皮下。

(9) タナグモ科

27. クサグモ 多数。
28. イナズマクサグモ 卵のう造製中。卵のうはクサグモより大きく横に長い。又、卵のうの外壁まで丈夫な袋状に仕上げる。体長は16mmあり。
29. コクサグモ 多数生息。
30. ヤマヤチグモ 山林の瓦隙のところに造巢。多数。

(10) キシダグモ科

31. アオグロハシリグモ 草本系の穂先に卵のうを付けて、卵から孵化した子グモを守っている。今が巣立ちの時期らしい。手で触れても逃げようとせず極めて攻撃的である。私のピンセットの先にとびついたりする。(写真数枚)
32. イオウイロハシリグモ アオグロハシリグモと同様、子グモを守っている。子グモは黄色の体をしており、近づくと四方八方に散る。まどいの終エンらしい。(写真数枚)

(11) コモリグモ科

33. ウツキコモリグモ 水田のところ、山手の山林にいる。既に卵のうを腹端につけて走り廻っているものもいる。

(12) カニグモ科

34. アシナガカニグモ 毛深い美しいクモである。草本系の葉裏に生息。(写真)

35. ハナグモ 幼体、亜成体である。

36. キエビグモ 杉の樹皮下。

37. ワカバグモ 卵のうを抱いた成体や幼体。

38. エビグモ 亜成体。

39. フノシグモ 草本系にて採集。

40. ショコグモ 草本系にて採集。

41. ヤミイロカニグモ 同上。

42. シナカニグモ 筆者初採集。大形のおむすび形の腹部が可愛らしい。

(13) ハエトリグモ科

43. ネコハエトリ 草本系にて採集。亜成体。

44. アダンソンハエトリ 成体。

45. デーニッツハエトリ 成体。

46. オオハエトリ 梅林先生採集す。成体。

47. アリグモ 草本系にて採集。

(14) フクログモ科

48. カバキコマチグモ[※] 幼体。

49. フクログモ 幼体。

50. ヤハズフクログモ 幼体。

※ カバキコマチグモのものと思われる産室採集。中に親グモの死骸があり、子グモが15~16匹生息中であった。

(15) アシダカグモ科

51. ツユグモ 草本系より採集。亜成体。

(16) シボグモ科

52. シボグモ 亜成体。山林の地表面にて採集。

おわりに

以上16科52種であった。美鈴湖周辺のこの季節は、秋のはじまりを思わせる涼しさで、カンタンの鳴く音が物悲しく感じられた。採集品目のうちハツリグモは長野地区初記録とのことである。なお不明種として雌雄を採集したのでいずれ報告する。今後とも「蜘蛛をたずねて」と題して従来の記録を整理していくつもりなので、よろしく御指導下さい。次回は沖縄八重山群島の予定。

付 記

カナコキグモの網について

粘土質の土手の窪みや木の根元と地表面の交錯する窪みに造網している。網はうすい膜様で、全体が密閉した袋状のものである。餌物が膜状網（仮称）の上を歩くと、内側より咬みつき捕えるらしい。時にはポツン、ポツンと穴があいているものもある。又、今時期が交接期とみえて雌雄同棲しているのも多数発見す。雄が如何様にしてこの膜状網の内部に侵入するのか不思議である。餌物を捕えたあとの網の破口からでも入り込むのか、それとも独得な求婚様式があるのかどうか、今後の検討が必要であろう。網の大きさは3～4 cm位だが、体長に比べると数百倍の面積にあたろう。卵のうは残念ながら発見出来なかった。

小 観 察 あ れ こ れ (3)

高 野 伸 二

◎ 富士山のヤマキレアミグモ

1973年7月15日 富士山五合目、スバルライン終点の小御岳神社の建物に、たくさんのキレ網が張られているのを見た。軒端のある場所では網と網が接するほどであったし、木の枝にたくさん結びつけられているおみくじのへこみの中にひそんで、キレ網を張っているのもいた。追い出してみるとこの網の主はヤマキレアミグモであった。三合目の旧バス道の廃屋の軒にも数個のキレ網を見、このクモであるのを確認した。

本種は北方系のクモで、八木沼先生の大図鑑の初版が出た時（1960年）には、カラフトにはいるが、日本からは未記録となっている。その後、八ヶ岳や御岳で発見されたが、こんなにたくさんいるのは珍しいのではないかと、思って新海さんにうかがったところ、新海さんも今年の夏、八ヶ岳でたくさん見たとのことであった。富士山はクモ屋さんだけでなく、他のムシ屋さんからもあまり省られないようである。それにしても、私はこの15年間、ほとんど同じ時期に富士山御中道の鳥の観察をしており、いつも小御岳神社に泊るのに、今まで気づかなかったとはどうしたことであろう。まさか、今年急にふえたわけでもあるまいに。

◎ 台湾で見たクモ

1973年8月2日から8日まで台湾を旅行した。台北—嘉義—阿里山—日月潭—溪頭—台北というコースで、1カ所に1日しか居らず、しかもある事情から採集もできなかったので、ちらりと見ただけであったが、気をついたクモについて書いてみたい。

○ オオジョロウグモ 阿里山の麓、日月潭、溪頭、台北郊外で見た。さすがに大きく、網も壮大であるが、広い空間に張られた網には主網前後の不規則網ははっきりとは見られなかった。また、網の完成後も残っている足場糸が、ジョロウグモの場合のように、たて糸と2カ所で付着せず、1カ所で付着していた。従って足場糸はジョロウグモのようにジグザグにはならない。

- ヤマキレアミグモによく似た種 これより約1カ月前に富士山でヤマキレアミグモのキレ網をたくさん見たが、8月4日、阿里山森林鉄道の終点についた時、人家の軒や太い枯れ木の下に、たくさんのキレ網があるのを見て、富士山の場合とよく似ているので驚いたが、果して、網の主はヤマキレアミグモによく似たクモであった（或いは同種かも知れない）。このクモの標本は新海さんにお渡しして同定をお願いしてある。日本でも近年になって高山で発見されたこの属のクモが、台湾の高山（標高2,400 m位）にもいることに興味をおぼえた。ちなみに溪頭でも同じようにキレ網を張るクモがいた（標高約1,200 m）。
- ザウタートググモ これは萱嶋先生の「台湾の蜘蛛」の口絵に原色でのっている美しいクモで、腹部は黄色で、横につき出たとげは赤い。溪頭で2個体を見ただけであるが、枝間に垂直円網を張り、中央に占座していた。1個体は垂直地位、他は斜め地位であった。萱嶋先生は網は黄色と記しておられるが、私が見たのは2つ共黄色には見えなかった。トググモ同様、わく糸に点々と白い糸のかたまりのかざりをつけている。
- ボロアミグモ 溪頭の山道の路傍のがけにクサグモのたな網を大きくしたような網が張ってあった。クサグモの場合とちがい、たなの部分に糸の濃淡があり、白い斑が散在しているように見えた。トンネル状の住居の中から、大きなボロアミグモが走り出て来た。日月潭や阿里山では見なかった。
- コガネグモ科の不明種 体長10 mm位の腹部の長めのクモで、形はちょっとサガオニグモに似ている。溪頭で2個体を見ただけであったが、地上約1 m位の樹間に大きな垂直円網を張り、日中も下向きに占座していた。このクモのおもしろい点は、第四歩脚の脛節と蹠節に毛が密生していることで、ちょうどブラシを2つつなげたようであり、一見すると第四脚のみ太く見える。このクモは生きえのまま1個体を持ち帰ったが、新海さんにさしあげたので、そのうち和名もわかるだろう。
- その他のクモ
 - 日月潭でスズミグモの網にいた大形のチリイソウロウグモを見た。赤色球形の卵のうもあった。
 - 日月潭でコガネヒメグモそっくりのものを見た。
 - 日月潭のホテルの屋根がわらの間に、夕方大型のオニグモが出て来て網を張っているのを双眼鏡で見た。腹部が三角形に見え、ミツカドオニグモかと思ったが確認できなかった。
 - 日月潭でチブサトググモを見たが、垂直円網の片側（クモの背面側）に不規則な糸をはり、それに例のかざりをつけているものが多かった。
 - 溪頭ではチュウガタシロカネグモがひじょうに多く、いたるところに水平又はななめの円網を張っていた。
 - 台北に近い陽明山で、木の葉のうらにへばりついて死んでいる大型のコガネグモ属の1個体を見た。腹部が白い菌におおわれ、何の種かわからなかったが、円網がまだ残っていて、X字状のかくれおびがあった。
 - その他、一見ヘリジロオニグモに似て腹部前方に大きな黒斑のあるオニグモの1種、ナカムラオニグモによく似たもの、ハシリグモ類の子グモのまどい（卵のうのからはあったが親はいなかった）などを見た。

◎蜘蛛観察会開かれる

去る10月10日の体育の日に、先に葉書でお知らせした通り神奈川県厚木市飯山観音付近に於て、山川守氏の御案内で蜘蛛観察会が催された。予定の10月7日はあいにく雨天だったため10日に延期されての開催だったが、当日は幸い晴天にめぐまれ多くの収穫が得られた。高野伸二氏は野鳥関係の方々をひきいて来られ、また小沢実樹氏は御子息ともども熱心に観察をされて、終始なごやかな会であった。何といっても特筆すべきはあまり記録のないオダカグモが多数発見され、しかもその生活状態が観察されたことである。東日本では初めての記録であろう。当日参加されなかった方にはお気の毒であった。いずれ詳しい発表がなされることと思う。

<参加者>高野伸二・新海栄一・栗原輝代子・小沢実樹・小沢宇多郎・山川守・小野展嗣
 浦谷鶴彦・川内 博・中村桂子・藤本和典(後の四氏は野鳥の会会員の方々)

◎Dragline

このたび新たにクモ短信の頁を設けることになりました。名称は松本誠治氏の命名でDragline(しおり糸)と決まりました。分布・生態などの小記録を気軽に投稿下さい。一応400字以内とします。きれいに書いて下されば葉書にて結構です。(編集者)

会報への投稿も歓迎します。標本交換、文献等の情報交換に御利用下さい。

編 集 後 記

前号の後記に「9月にはぜひこの頁の成果を」と書いたのですが、もう年も押し詰った近頃になっても、届いたのは高野伸二氏の一篇だけとはさびしい限りです。談話会も老衰してきたのでしょうか。これが嵐の前の静けさであることを祈ります。といっても嵐が起って洪水となっても、紙代、印刷代等の値上りで思うように発行できないかもしれません。しかし、そういうことで編集者を泣かせることは一向にかまいません。よろしく御協力下さい。

KISHIDAIA 第37

1973年12月26日印刷 編集者 小野展嗣

1973年12月27日発行 発行者 萱嶋 泉

発行所 東京 蜘蛛談話会

〒191 東京都日野市豊田1896 萱嶋 泉 方

PHONE 0425 (81) 7128

印刷所 東京都豊島区目白2丁目14-2

小山タイプ